買った人も魚が安く買えるし、売る方もたくさん売れる。ところがその陰では、全部の魚は売れないわけですから、廃棄物になって捨てられてしまう魚が出てきます。スーパーマーケットも消費者もWin-Winというのは、かなりを廃棄できるほど資源が大量にあって初めて成り立つのです。

たとえば、近代の水道のシステムは、あらゆる用途に飲み水を供給していて安価です。下水というものはもともと世の中にはなく、不要なものを適当に飲み水に流しこんだものが下水なのです。江戸時代には、汲み取っていますから、下水にし尿は入りませんでした。パリでは、既設の排水溝に流した方が楽なので、下水道として流しました。それを日本は近代だと思って真似ました。飲む水だけを水道で供給すればいい。他の用途の水は下流の水域で循環させたらいいのです。そうすれば、上流の一番水質のいいところにダムをたくさんつくり、すべての用途に飲める水を蓄えておく必要はありません。近代文明の浪費です。次の時代の文明では「必要なところに必要なものを、最小限のエネルギーで」ということが鍵になる。さまざまな人びとと生物たちの共生が鍵の言葉になります。そんな質を利用する社会資本を整備することが必要で、それには知恵がいります。

単能社会から複能社会へ

――拡大から縮小へのパラダイムの転換を図ることは容易なことではないと思います。そのなかで、教育の果たす役割はどのようなものでしょうか。

丹保――近代の教育では部分人間を育てるだけで、全人的な多機能人間は育てられません。大学は4年で、私も大学では上下水道なんて4単位ぐらいしか習っていません。しかし、それで一生飯を食いました。そんなことができるのは、近代の縦割り社会だからです。次の時代は、一人の人間が一つの能力しかないような単能社会から、複数の能力を持つ複能社会になると思います。たとえば、かつてのお百姓さんはいろいろなことができるから、「百姓」だったわけです。

複能社会といっても人間は一度には複数領域の勉強はできません。一生涯かかって勉強をする。ですから、大学はどこへ行こうと構わないし、必要なときに、そのとき勉強をすればいい。大学は基礎を教える高等教育機関として、基礎教養教育を行えばいい。だから、歴史も地理も心理学も教える。そして、学部ではシビルエンジニアリングと魂の話をする。魂のない状態が一番怖いですからね。次は大学院で、本当の専門プログラム（コンパクトな）を学ぶ。鉄道をやる人間に水道を教える必要はない。もし必要になったら、もう一つ本当の専門プログラムを勉強すればいい。それを何回か積み重ねると、通信もできて、鉄道もできるという人間ができるわけです。今はそういうトレーニングシステムがありません。何回でも勉強できるように、企業でも専門研修制度をつくるとか、政府がそのための奨学金を出す。そういう世界スタンダードを日本でつくればいい。私は放送大学の学長もやっていましたが、オープンユニバーシティシステムを採用するということを考えてもいい。今は大学がブランド志向になっています。これからはブランドでは飯は食えません。大学のブランドではなく、個人の能力を認めてやれる社会。それが次の時代の一段成熟した社会だと思うのです。

2010年9月29日（水）北海道立総合研究機構にて

［執筆］駒崎 文男　［撮影］神田 佑亮